⑥武蔵中原から新丸子まで中原街道を訪れる 2019. 6. 12　秋山

武蔵中原駅ー庚申塔・地蔵尊ー旧中原村役場跡ー油屋の庚申塔ーつけぎ屋の供養塔ー「かぎの道」ー西明寺ー御主殿稲荷ー御蔵稲荷ー小杉陣屋跡ー石橋醤油店ー安藤家長屋門ー旧原家母屋跡ー中原街道（解散）　オプション　新丸子橋ー丸子の渡しー大乗院ー新丸子駅

JR 南武線

南部線は私鉄の南部鉄道により開業した路線です。大正８年（1919）５月、代々名主を務める家の生まれで 16 代当主，村会議員の秋元喜四郎が発起人代表となり鉄道院に「多摩川砂利鉄道敷設免許申請」を出しました。この秋元喜四郎はアミガサをかぶって、大正４年（1915）多摩川の堤防建設を直訴した人物です。

南武鉄道（JR 南部線）は、多摩川砂利鉄道といって砂利運搬が目的でした。多摩川の砂利を川崎臨海の浅野セメント、日本鋼管等に貨物輸送のために鉄道が必要でした。計画では、現在の新丸子駅付近で東急横浜電鉄（東横線）と交差し，中原街道に沿って北上する予定でした。ところが地元の小杉住民の激しい反対に逢い、やむなく現在の武蔵小杉に変更し、水田の真ん中を走ることになりました。

小杉の人たちが反対した理由は、当時半農半商や農家の多くが草屋根のため、汽車の煙で火事になる危険があること、線路ができると、それによる水害の心配があった、と言われています。その後、武蔵小杉が中原の中心になり小杉の十字路周辺はさびれてしまいました。

開通当初の南部鉄道

多摩川の水害

秋元喜四郎

多摩川の水害

多くの河川がそうであるように、多摩川も昔から大雨が降るたびに出水・氾濫を繰り返す「あばれ川」でした。秀吉の命で関東に入国した徳川家康は、慶長５年（1600）に多摩川に六郷大橋を架けました。ところが、その橋は洪水でしばしば流出、破損を繰り返しました。このため約 90 年後に徳川幕府は再架橋を断念しました。貞享 5 年（1688）の洪水で流失してからは、明治初期に至る約 180 年間は、渡船による川越が続きました。その間、しばしば起こる増水による川止めで、人々は大変困りました。この多摩川流域の農民にとって田畑を耕し、自らの生活を守っていくためには、何よりもまず、「水との闘い」でした。その一つは水を確保すること、もう一つは水から生活を守ることでした。

江戸時代の治水工事は、一般に水の流れに逆らわないことを原則としたといわれています。堤防は流れが曲流し水当たりが激しい場所に、低い堤防を築くだけで、ときれとぎれの「カスミ堤防」を築くだけでした。このため、増水した水はたやすく堤防から溢れ出て、沿岸の土地は洪水に見舞われました。

アミガサ事件

暴れ川と言われた多摩川の早期築堤を求めて、大正時代に橘樹郡御幸町（現・川崎市幸区、中原区の一部）の村民が、大挙して神奈川県庁に陳情に訪れたのがアミガサ事件です。

多摩川は江戸時代から水害に悩まされてきました。明治、大正期にも大雨のたびに氾濫や洪水を繰り返しました。特に明治 43 年（1910）８月の大水害は「京浜間海と化す」と報じる大惨事になりました。住民は水害のたびに舟で家財を運び高台に避難しました。国や対岸の東京側からは、川崎側の堤防の設置に反対したといわれます。

大正３年（1914）９月 16 日未明、度重なる水害に耐えかねた橘樹郡御幸町の住民約 200 人全員が、目印の代わりに農作業で使う編み笠をかぶり陳情のため県庁をめざしました。洪水で渦巻く鶴見川を渡り、警官と小競り合いを繰り返しながら横浜公園に向かいました。周辺住民も加わって陳情団は 500 人ほどに膨れ上がりました。このアミガサ事件は、後に多摩川沿いの郡道２km にわたり盛り土をする有吉堤を築く、多摩川の治水事業の大きな一歩となったのです。

有吉堤の記念碑

道路をかさ上げした有吉堤

有吉忠一

有吉堤を築く

集団行動が禁じられた状況下に住民が県知事に直訴したアミガサ事件を受け、新たに着任した有吉忠一神奈川県知事は、道路改修に名を借りた代用堤防という地元の要望を受け入れ、道路のかさ上げ工事が行われました。ところが対岸の東京側から激しい反対運動が起きたのです。対岸に堤防ができると洪水がひどくなるといって、国に働き道路のかさあげ工事の中止命令を出させました。しかし、有吉知事はこの命令を無視し工事を続行しました。

このようなアミガサ事件から始まって有吉堤防竣工にいたる、多摩川下流住民の築堤にかける願いは、まもなく実を結びました。国は大正６年から地元府県の半額負担を条件に、国庫半額負担により、多摩川改修工事を早めに行うことを決めたのです。この事業は十数年の歳月を要して昭和９年に竣工しました。

自らの処分を顧みず郡道のかさ上げ工事を実施し、完成すると「有吉堤」と呼ばれました。この郡道かさ上げの工事は、その後の国の本格的な治水工事を行うきっかけとなりました。

神地（ごうじ）の石塔

武蔵中原駅から旧中原役場の間の中原街道には、庚申塔、地蔵尊などがあり供物や献花が絶えません。門前市が栄え豊かで平和な暮らしがあった往時の民衆の信仰が、今も脈々と続いている証です。

旧中原村役場跡

二ケ領用水の神地橋（こうじはし）の手前の右手にあり、明治 22 年（1889）に橘樹郡の６カ村（上丸子・小杉・宮内・上小田中・下小田中・新城）が合併して中原村が誕生。

小杉十字路

中原街道と府中街道が交差する所で、かつて大名行列や旅商人が行き交う場所でした。上小田中（神地）に村役場ができ、近くに毛織物工場・銀行・信用組合が開設され、料理屋、旅館、床屋、医院などの商店街が形成されました。また東京からいち早く「大売り出し」を導入して、歳の市の大売り出しなどで近隣の村から客を集め「神地銀座（こうじぎんざ）」と呼ばれるほど賑わいました。

大正 15 年（1926）東急東横線が開通し、昭和 10 年（1935）に待望の丸子橋が完成すると、上丸子の都市化が進むことになりました。戦後の中原は中心施設が武蔵小杉周辺に移動してしまい、中原街道の小杉十字路周辺や街道の沿線は、次第に寂れていきました。

油屋の庚申塔

小杉十字路を過ぎ、カギの道に向かって中原街道を歩くと、横丁に入る角に「東江戸道、西大山道、南大師道と刻まれた庚申塔が祀られています。古くは油屋の屋号を持つ小林家の角にあったので、このように呼ばれました。

附木屋（つげきや）の供養塔

カギの道の手前にあり附木屋という店の横にあります。左側面に「右は橘樹郡稲毛領小杉駅」　土台に「東江戸、西中原」と刻まれています。

カギの道

新設工事中の道路

西明寺の仁王門

カギの道

中原街道を小杉十字路から西明寺入口に向かう途中に「カギの道」と呼ばれるクランクの道があります。この道の由来は、徳川二代将軍秀忠がこの地に御殿を建てたことにさかのぼります。見通しが悪く現代では決して便利とはいえないのですが、この形状は敵が侵入するのを防ぐのに有効とされ、城を守るため重要な役目をしました。

西明寺の入口にこの小杉御殿の跡を示す石碑と「御殿の見取り図」が設置されています。御殿の敷地はおよそ 12,000 坪、表御門、御主殿、御番屋敷、御賄屋敷、御蔵、御馬屋敷などが示されています。江戸初期にはそのような役割を担っていたものの自動車社会の現代では、交通事故を招く可能性が高い場所になっています。このため川崎市はこのカギの道を解消するため、西明寺の入口から小杉十字路を直進する道路の新設工事をおこなっています。

西明寺

創建年は不明ですが、弘法大師が東国巡礼に際し、命じて堂宇の建設をしたと伝えられています。真言宗智山派の寺院です。徳川家康が鷹狩の際、中原街道を通るとき西明寺に休息することがありました。二代目将軍秀忠は、西明寺の敷地に小杉御殿を造営し、将軍家の崇拝をうけ寛永 19 年に寺領 10 石の朱印状を受領しています。

小杉の小杉学舎

西明寺のほぼ中央の左側に町内会館があります。ここに明治 6 年小杉学舎が建てられました。それ以前は西明寺に寺子屋がありました。小学校は今と違って４年間でしたが、５.

６年かって卒業する子がいました。この校舎は大正 12 年（1923）まで多くの子どもが通いました。校舎は後から２教室が増築されました。校長住宅が校門を入るとすぐのところにありました。

小杉御殿

西明寺の山門の右わきにある井出家の横道から、石橋醤油商店の左側の細い道一帯、（西丸子小学校一帯）が、江戸時代の初めから約 50 年ほど、江戸の徳川将軍が利用した小杉御殿のあった場所です。徳川家康が江戸に幕府を開くと、将軍や多くの大名たちがこの街道を通って江戸に向かいました。その頃から将軍の宿舎に使うために慶長 13 年（1608）に建てられたのが小杉御殿です。

寛永 17 年（1640）に御殿が建て直され、約１万２千坪（約４万平方ｍ）の広さになりました。小杉村名主安藤家に残されている「小杉御殿見取り絵図」によると、御殿の表御門は中原街道に面し、左手奥に将軍が休む主御殿。北川の門をくぐると、「御蔵」と「御賄屋敷」が見え、主御殿の東側に御殿番屋敷や陣屋、そして代官屋敷が並んでいました。

御主殿稲荷

中原街道のカギ道から北側に少し入ったところ、住宅地の中に小さな稲荷があります。ここが小杉御殿の御主殿のあった場所です。現在は御主殿稲荷が建っています。

御蔵稲荷

住宅地の路地の中にあり、なかなか見つけることができません。ごく小さな露地に稲荷神社の他に町内会の祭具倉庫などが設置されています。この場所は多摩川沿いから少し離れていますが、小杉御殿があった当時は、御蔵稲荷のすぐ北側は多摩川が流れていて、この自然の要害により守られていました。

陣屋稲荷・小杉陣屋跡

小杉御殿の建設が行われた徳川家康の頃は、多摩川周辺の土地は非常に生産性の低い状態でした。多摩川の水辺でありながら水利が悪く、草地や荒れ地に小さな集落が点在しているのみでした。

米の増産に取り組んでいた家康は、江戸各地で新田開発を計画しました。この計画に多摩川からの農業用水路の建設を進言し、用水奉行に任命されたのが小泉次太夫です。次太夫により建設されたのが二ケ領用水であり、その拠点になったのが小杉陣屋です。

陣屋　徳川幕府の直轄領の代官の住居及び役所が置かれた建物のこと

御主殿稲荷

御蔵稲荷

陣屋稲荷

石橋醤油店

キッコー文山の商法で石橋醤油店が醤油作りを中原の地で始めたのは、明治３年。昭和 26 年に操業をやめるまで、ここには大樽を据えた醸造工場や蔵が立ち並び活況を呈しました。また昭和 50 年くらいまで、高い煙突があつたと伝えられています。

八百八橋　　野村文左衛門

江戸と平塚を結んでいた中原街道は、物資や農産物の輸送に欠かせない道として、地域の生活に深いかかわりを持っていました。今も街道沿いには、小杉御殿跡や名主長屋門、陣屋跡、石仏などが残り、この地域で織りなされてきました歴史を忍ことができます。いまでも地域に語り継げられているものの一つに「八百八橋」があります。

18 世紀の中頃に丸子の渡し周辺の旧松原集落際で、「ほしかや（干鰯イワシ）」の二代目として肥料問屋を営んでいた野村文左衛門が、地域の人々のために私財を投じて、中原街道沿いに千個の石橋を架け、安政２年にこの世を去るまで数多くの石橋を架け、その功績から後年「八百八橋」として、人々に語り継がれています。

名主安藤家長屋門

木造平屋建て、門の両側に部屋が設けられ、中央の屋根の部分が中二階になっています。寄棟造り、瓦葺きで幕末に建てられたといわれています。安藤家はかつて小田原北条氏に使えたとされる旧家でした。北条氏が 1590 年に豊臣秀吉に敗れ没落すると土着・帰農し、江戸時代には近隣一体の名主たちを代表する割元名主を務めました。

割元名主　近隣一体の名主たちと代官との間で法令の伝達や年貢のとりまとめにあたる役目をしました。

石橋総本家（原家）陣屋門

原家９代目の文次郎氏か明治 22 年（1889）から 24 年の歳月をかけて母屋を大正３年（1913）に完成させました。総檜造りの母屋は平成 13 年（2001）に川崎市の重要歴史建築物に指定されました。母屋は現在多摩区の川崎市立日本民家園に移築されています。

安藤家長屋門

原家陣屋門

丸子の渡し

丸子の渡し船場跡

近世初期、中原街道は小杉（中原区）、中原（平塚市）に将軍の休泊施設である御殿が設けられ、江戸と相模方面を結ぶ重要な街道でした。その後、東海道が整備されるに従い、中原街道は地域の生活圏を結び生産物を、帰りは農産物の肥料となる下肥を積んだ荷車でにぎわいました。また道の両側には農家や商家が立ち並び、居酒屋などで一休み人々も多かったといわれています。そして大正年間の河川の改修、昭和 10 年 5 年月 10 日の丸子橋開通により、今の中原街道の姿へと変わっていきました。

丸子の渡しは、文化７年の資料によれば、渡船場には、水主８名、定番 1 名が詰め、馬船３隻が就航し、人馬の往来が多く夜でも通行出来たといいます。

参考資料　多摩川両岸四ケ領用水の原風景　長島保
多摩川の水害　長島保
歴史資料室　新小杉開発（株）
現地の説明板